開拓の群像(四)

芹沢元蔵

タコ労働から―牧場主
農民運動の先頭に立つ

芹沢元蔵

◎生立ちとその時代

戦後、佐呂間で、農民運動の先頭に立った芹沢元蔵は、一八八九年〔明二二〕十一月、静岡県駿東郡玉穂村茱萸澤で、芹沢家の三男として生を享けた。

芹沢家は、地域では相当の名家であり、学のある人を自宅に招いて、子供の教育をする程で有ったと言う、元蔵も当時の御殿場中学校〔今の高校〕を卒業して居る。

元蔵は、一九一二年〔大元〕頃、知来十五号の、当時の山本牧場開拓の為入地したのだが、前年迄、国鉄池北線〔現ふるさと銀河線〕建設工事のタコ労働に従事したと言う。

何故、北海道の鉄道工事え、而も苛酷な重労働のタコ部屋を体験したのか、つまびらかで無い、此処で、みだりに推論をするべきではないが・・向学心に燃えた青年元蔵が、中学校卒業後、一人上京し、勉学に励んで居るうち、不図、当時、都会で横行した、周施屋の甘い言葉の罠に落ちたのかもしれない？〔タコ労務者の中に苦学大学生が多く居た〕

●非道な北海道開発

明治の政府は、貧困な国家財政の中で北海道開発を急ぎ、数千いや何万人とも言われる囚人〔主に国事犯〕を連行し、道路や、鉄道港湾、等の建設に、言語を絶する非道な酷使で使役、百年を過ぎた近年なお、当時の工事跡や、道路脇から、数百にも及ぶ犠牲者の白骨が出土している。

当時のマスコミに人道問題として騒がれ、囚人使役は一八九五年〔明二八〕頃から姿を消したが、それに代わって「タコ部屋」が登場するので有るが、「監獄部屋」とも言われ、これまた陰惨極まりない、非人道的扱いで飯場に閉じこめ、粗末な食物で酷使をするのだ、体力のない者や、病気にでもなれば、工事の盛土の中え埋めてしまうのだ。

東京など都会で若い学生や、ちょっとお金に困った人が、或いは北海道で一稼ぎを夢見て来た人が、憎むべき周施屋の巧みな口車に乗せられて、気が付けば、四六時中監視付きの、薄暗い監獄部屋に連込まれて居るのだ、

官憲も業者の側に立ち、逆にタコを取り締まる有様だった、そしてこの苛酷な労働、非人道的搾取は、その後も永く鉄道工事や道路工事に常用され、太平洋戦争直後迄も続けられたのだ。〔北海道新聞社―北海道の歴史〕

●国鉄池北線〔現銀河鉄道〕は、一九〇七年〔明四〇〕三月に、池田―網走間を網走線として着工し、一九一二年〔大元〕十月全通して直ちに営業を開始して居る、元蔵はこの鉄道建設工事に稼動して居たと言うが、頑丈な身体で有ったから、苛酷な労働にも耐え抜いたのか、又は、人並み勝れた度胸の良さと、理路整然とした論理展開の人物で有ったから、或いは現場の段取りや、幾人かの頭で有ったのであろう。

◎サロマベツ原野、知来で牧場開拓

一九一二年〔明四五〕、池北線〔現ふるさと銀河鉄道〕建設工事は五年の歳月をかけ完工した。

元蔵は現地で土工組から離れ、間もなく、山本馬太郎氏〔当時北海タイムス記者〕が、国有未開地の売払い許可を受けた知来十三号から十六号間の八線以北国有林界まで、二百十九町歩余の、牧場造成と管理を引受ける事となり、現在の芹沢茂男さん〔ご子息〕の住

居の場所え移住して来たのです。

この広大な原始林をどのようにして開拓したのか、資料に拠れば一九一五年〔大四〕十一月には成功証明が交付されて居るのです。

元蔵は、又、地域集落の発展にも熱心で、入植して間もなく、部落の若者に呼び掛けて知来青年会を組織して、初代の会長に推挙されている、開拓当時、警防的活動や、以前に知合った大学出の、金子健一の移住を促し、この人を軸にして若い人の勉学や心身の修練的活動も盛んに行い、この時代既に、それぞれの意思や主張を論じて、弁論会も頻繁に行い、良きリーダーであったのだ。

元蔵は、明治の時代の高等教育を受けて、開かれた視野に立って物事に対処し、地域づくりに若い情熱を燃やして活躍した。

◎佐呂間農民同盟結成の礎石

一九四五年〔昭二〇〕八月、戦争に敗れ、農村地帯も暫らくは虚脱状態、混迷の中に有ったが、間もなく、各地で、戦前からの産青連運動や、農民運動的な意識高い人々が声を挙げ、同年十二月二十八日、札幌で北海道農村建設連盟が結成された。

この事によって、全道農村に火が付いた様に次々と組織が結成されていった。

こうした中で元蔵は、佐呂間にも農民組織を結成するべく、村内の意識有る者と共に発起し、遂に一九四六年〔昭二一〕三月三日、結成大会の開催を見たので有ります。

ここに全村農民一、二〇〇戸が結集し、佐呂間農民連盟の歴史的発足をしたので有る。

芹沢元蔵は、一九四七年〔昭二二〕から第二代執行委員長に就任、創生期の組織の充実に尽くしたのです、尚、この年全道に合わせて佐呂間農民同盟と改称している。

徳川の昔から、更に明治から終戦まで、農民が措かれてきた階級的矛盾を打破し、農は国の大本で有るとの誇りをもって、堂々と発言してきた人で有った。

芹沢元蔵は一九〇六年〔昭三五〕七一歳で他界された。

その生涯は、波乱に満ちたもので有ったが、世の中に向けて是は是、非は非として大きく生きた人物であった。〔文責室井四郎〕

〔協力　芹沢元雄　芹沢茂男〕

〔資料　知来郷土史北見地区
農民運動二十年史〕

開拓の群像(五)

若佐地域富丘に入植の人

渡部　長太郎（明治四年生れ）

渡部　長太郎

渡部長太郎は、男盛りの三六歳にして豊富な資金を持って、佐呂間の開拓に勇躍として一家を挙げて、現在の富丘の地に来たのは、明治四一年であった。その出身地は、愛媛県周桑郡吉岡村大字上市で、富丘のあの有名な先輩、近藤直作にさそわれてのことであったが、（徳永の親の出身も愛媛県で、私が父から聞いていたのは、「長太郎はんは、内地の田畑を売った金を持っとる（伊予訛のまま）けん、あそこは楽なんぢあ、頭もええもんぢあから、人のもめごとも、ようめんどう見る人ぢあきに」）私が、昭和一三年に、満蒙開拓青少年義勇軍に、進学のつもりで志願して採用されて出発の日が決ったとき、渡部長太郎さんが私の家に来て、

「良行さんが義勇軍になって、満州に行くことについて、岐阜（中園）・武士市街（若佐市街）・中武士（武士）・下武士（朝日）藤之台（富丘）の区長（現自治会長）に、こ

う話しましたら、徳永の良行さんや中原の富夫さん等が、小学校卒業してまだ若い少年の身で、義勇軍となって満州に行く人じゃから、出征兵士と同じように武士校下（若佐）全員で、見送って上げんかねと、それぞれの区長さんに話したら、五人の区長さん等みな、私の意見を聞いてくれたので、良行さんの出発のことについては、私に委かせてくれんかのう」と言って、私（筆者）と私の父が「お委せします」と言い、「よろしくお願いします」と私の、満蒙開拓青少年義勇軍に志願出発の件を、渡部長太郎氏に委せたら、（以下敬称省略します）

昭和一三年七月三日、私の故郷出発は、現在の若佐小学校当時五百有余の生徒全員に日の丸の旗を持たせて、校下全戸からの見送りを、私はうけるようにして下さって、故郷を出発したのでした。満一四歳でした。

何故、前置きに私事を長々と書きましたかと言えば、渡部長太郎と言う人の声がかかれば、以上のように、大勢の人を動かすだけの人望があったことを知って慾しい意味あいがありましたのでした。

資金面の強さは、故郷の資産を持って来て、速やかに、畠造りの開墾を完成させて、住宅納屋も造って、畠が出来上がれば収穫が毎年上がる。元々経済力のある人一例を上げれば、ラジオ放送が、日本の国で大正一四年五月五日に開始されたら、逸早く、高い柱を二本立てて。柱から柱に線を引いて（当時のラジオ聴取の施設）ラジオを家族そろって楽しませる程の人であった。

以上の事柄の上に、四人の男子、五人の女子と、働き者ぞろいの子宝に恵まれたことが開拓農家の成功を早やめている。家庭的に恵まれて来ると、人のめんどう見のよい長太郎のこと、藤之台（現富丘）現在の呼び名の自治会長を、大正八年までしている。明治四〇年から大正元年（明治四五年）当時組長と呼んでいたのが不詳となっている。記録がないが、近藤直作が常に札幌に出ていたのだから、渡部長太郎がその任に就いていなければおそらく、他に誰がしていたろうと考えさせられる。

明治四二年に、小学校（当時教授所）建設委員長となって、当時の武士校下各五つの部落に呼びかけて、明治四三年に小学校の新築が完成している。完成した夜浮浪者がその学校に忍び込み、焚火をした火で焼失、翌年に建築委員長は青木平吉に替っているが、渡部長太郎は委員で協力し、学校建築完成させている。その校舎から次ぎ足し次ぎ足しして、昭和九年まで使用していた。

学校関係の功労に、現在のＰＴＡの前身、小学校後援会長等も、昭和八年から一三年までやっていた記録がある。

昭和一桁時代は凶作が四年もあって、小学校の必要経費は、国や町村から来る予算も少く、校下の父兄の負担で補なわなければならないので、後援会の名称が付けられていた。

長太郎は、自分の子供達が小学校を卒業してしまってからも後援会長をしていたのだった。

渡部長太郎について特筆すべきことに、私が知っていることに、産業組合の設立と、稲作のための水利組合の設立に。渡部長太郎は特に奔走したのだった。

先づ水利組合について

大正元年は、七月三〇日から始る。大正元年はまだ明治のうちとしたら、大正二年が大正始まりこの年、歴史的な大凶作不思議なことに、大正は一五年で終っている。大正一五年は七日不足だけこの大正の終り年が又大凶作、大正時代は作柄の悪い年でも平年作すれすれ位いの作柄で、大正五年が旱魃のひどい年だが凶作ではなかった。

大正時代に入ると、佐呂間内各地で、水稲の試作が始まった。何処の誰れもが米は絶対穫れると、太鼓判を押す程に試作が成功したものだから、「米作ろう、米作ろう」の声が各地に高くなった。若佐の川西で大正七年の米試作成功祝いに。女子供まで集まって。それも他所行きの着物を着て。千歯と言う道具を使って、稲の脱穀をして、米の収穫を祝う写真も残っている。

大正一〇年渡部長太郎が村会議員に選出されたら、公けの村として、米作の佐呂間村の

中で行政面から動き始めるように、議題として審議させたのが実が結んで、造田は、村の事業となって、道庁方面に、造田補助や、外事業完成の道庁の協力をさせることに成功させた。大正一二年に。その熱意が認められて、村長が水利組合長となって。渡部長太郎は、水利組合副組合会長に選ばれ、その職は、村長は名目の組合長だから、実務は、渡部長太郎の肩の乗っかってしまった。

当時の村会議員は、任期が二年であったので、渡部長太郎は、大正一二年の村会議員改選時に、「今大事なことは、佐呂間の人が米を、日本古来からの米を喰う人間であるから、わしは、佐呂間村の造田が完成し。村民が、他所から米を買わなくても、村内に穫れた米なら安く非農家も食べられるから、開拓の仕事の最後の仕上げに尽力するから、村会議員の再選は辞退させてくれないか」と、当時の部落の人達に説き話し、昭和四年まで、造田と水利事業に専念し。やっと、佐呂間村内に米の自給自足が固まった時点で、部落民から、村会議員になって地域社会のめんどうを見て下さらんかとの、願いを受け入れて、昭和四年から又村会議員に選出され、昭和一三年に亡くなるときは、村会議員の肩書きを背負っていた。

水利組合副組合長（実務一切担当）の職務中の、大正一五年三月一七日、北海道庁に、佐呂間村水利組合の各部落の、組合役員を伴なって、北海道庁にて、水利権問題解決に赴むいて、佐呂間村の水田農家の将来に対いして、国有林から流れ来る川水の使用する権利について、安心出来ることの手続き完了の働きもしている。

右の記録と、記日入りの写真、元若佐村村会議長兼社会教育会長河野勝高という方が、若佐郷土史には、必ず記録せよと言われましたそうして、道庁前で、佐呂間村の水利権問題で、陳情委員出札記念と写真裏に筆で書かれ、その参加者の氏名も書かれている写真を徳永にくれたのでした。

今年は佐呂間町開基百年記念の年、昨年の日本全国的の米作の大凶作。水田農家に嫁さんが来ないの声が聞かれる昨今、あの第二次世界大戦中の佐呂間村民の食糧増産に頑張り、戦後の飢餓を救う佐呂間の水田農家、開基百年を祝う中の、渡部長太郎という人の功績は、佐呂間の百年間の歴史の中で、佐呂間村の、村民が米が食べれるということの幸せに、骨を折った人であったこととして、佐呂間の開拓の群像として推薦されるべき人と思います。

もう一つ。産業組合を、佐呂間村の中に、「佐呂間村信用購買販売利用組合」と言う名の農家のための組合の設立に働いたこと。

渡部長太郎は、日本古来から、百姓は搾取の対象として、狡猾な商人。ずっと遡れば、武家時代、さむらいが統治しているころも、武士という特殊な輩に搾取されていた。佐呂間の開拓農家の生産物を、狡猾な商人から守って行くための（と言っても商人が全部悪いわけではありませんが）農民が農民を助け合う産業組合を作って、農家の生産物を、いくらかでも価格を有利に販売出来るようにと、産業組合の設立が叫ばれだしたのが、大正末期から昭和の始めにかけて盛んになって来た。

渡部長太郎は、産業組合設立の必要性をいち速く感じ、村内の各部落の同じ考えに目覚た同志と手を取り合って、産業組合を設立させるのだが、（後の農協）

右のことについて、話が又遠回りするのだが、最初の名称は「佐呂間村信用購買販売利用組合」とされていた。組合名が少し長ったらしいのは、これには訳があるのではないか。昭和一桁時代、産業組合の専務理事をしたことのある河野勝高氏から聞いたのだが、（若佐郷土史）作成中のころ、（昭和五三年ごろだった）

「今頃になって、産業組合の名が、佐呂間で何故、『佐呂間村信用購買販売利用組合』だなんて名付けたかは、はっきりした理由があって付けたと思うが、今わしが断定したようなことは、もう五〇年も前のこと、こういうようなことでと言うしかないが、あの開拓当時から、段々と既存農家の形に農村がなって来たが、農家をする人が渡部長太郎はんのような、頭のよい人ばかりなら、産業組合と言ってもどんなものか判断するが、あの当時の大半の農民は、組合の事業の趣旨を名前にせんことには、直ぐに判る人が少なかったか

らと思うが、そんな長ったらしい名前を付けたのに、殆んどの人は、佐呂間村信用購買販売利用組合だなんて言わなくて、只組合、組合と言って『組合に用があるから、今日は出かけるんじあ』と言うが、たまには産業組合と言うこともある位いぢあった」。

産業組合の設立には、その過程について、元「若佐神社誌」作成し、「若佐郷土史」の編纂委員でもあった。小島善之丞の話をここに参考に掲載して見ます。

産業組合の設立に至るまでの、農家のあり方流れなのだが、それは亜麻耕作ということからだが、今では、昭和三〇年代末期から生れた人には、一寸判らないだろうが、（くわしいこと省きます）

亜麻は大正五年から佐呂間村内に耕作始まって、大正九年に、佐々木一二・片山種四郎が中心となり、亜麻茎の共同販売第一加工を目的として、亜麻共同製繊組合を設立（組合長を佐々木一二）

大正一一年五月、亜麻製繊組合を改組、産業組合法により、佐呂間村亜麻購買販売組合として組織を強化した。（亜麻関係のくわしい工場の件省きます）。

佐呂間村の産業組合「佐呂間村信用購買販売利用組合」の設立は、「佐呂間村亜麻購買販売組合」の組織を強化発展させたと言ってもよいのでないか、

右のような経過の、佐呂間村、言葉の表現の善し悪しは別として、村民は全国からの寄せ集め、ここに、仲買い商人を向うに廻しての、農民を団結させて組合設立は、並大低の努力が要ったことではなかったか。

渡部長太郎は、個人的な経済力をバックにして、地域住民の生活の向上には、農民の生産物は、生産に苦労した農民の利益に還元させなければと強く考え、大正時代特に叫ばれた。デモクラシーと、キリシタン宗教の（良いか悪いかは別としまして、真面目に取組んでいた人なのでした。　産業組合この名称が、全国共通だが記録については、公けの記録として、昭和四一年発行の、「佐呂間町史」に書かれているのは、九一二頁の四行目に、

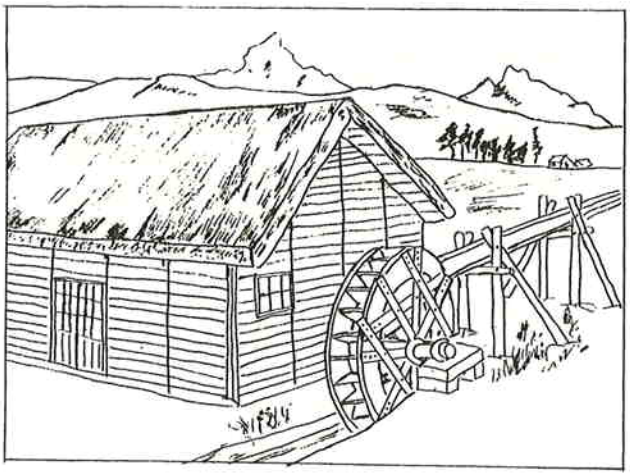
「昭和四年九月一七日、佐呂間村信用購買販売利用組合に改称、貯金貸付業務開始」と記るされているが。

現在、朝日部落佐藤常雄宅にある本物の、佐呂間村信用購買販売利用組合の発行していた貯金通帳が、これも公けの、下武士水利組合が使っていたのが保存されている。

右のようなことを考えたなら、北見地方としての各町村は、昭和四年九月一七日から業務開始となっていても、佐呂間村は、それより二年半程速く、貯金業務を実さいに行っている証拠があるのだから、佐呂間村の中の、産業組合設立に努力した人達の御苦労が伺がわさせられる。

その上に渡部長太郎の、組合運営上の命を掛けたと言ってはどうかですが。財産を掛けた、啖呵を切った話がある。

もう故人の、若佐村村長選挙に立候補を。村会議長の現役中にして、落選した人の河野勝高という人が、産業組合の専務理事としたこともあた経験の中で、産業組合設立当時何事にも思い掛けない金がかかった。何処からも借りることが出来ず、農家からの出資金の増資もこれ以上要請も出来ぬとき、佐呂間村産業組合設立当時の運営の苦しいときに、組



草茸き屋根の水車小屋

合長であった渡部長太郎は、（何処の金融関であったか筆者は忘れたが）理事一同説き伏せて、自分の開拓した土地三〇町歩と、後に購入した水田五町歩を、組合の借金の担保にするから、理事の皆さんの財産を、わしに一時預からせてくれんかと言って、理事者一同を承諾させて、その金融機関から、設立当時の運営のために、財産を投げ出して切り抜けた話を、河野勝高は私に話しをしたことがあったが。この確認を、この原稿作成中に、電話で、若佐郷土史作成の編纂委員であった最年長者の、山下寿一に電話で聞いたら、山下寿一は、

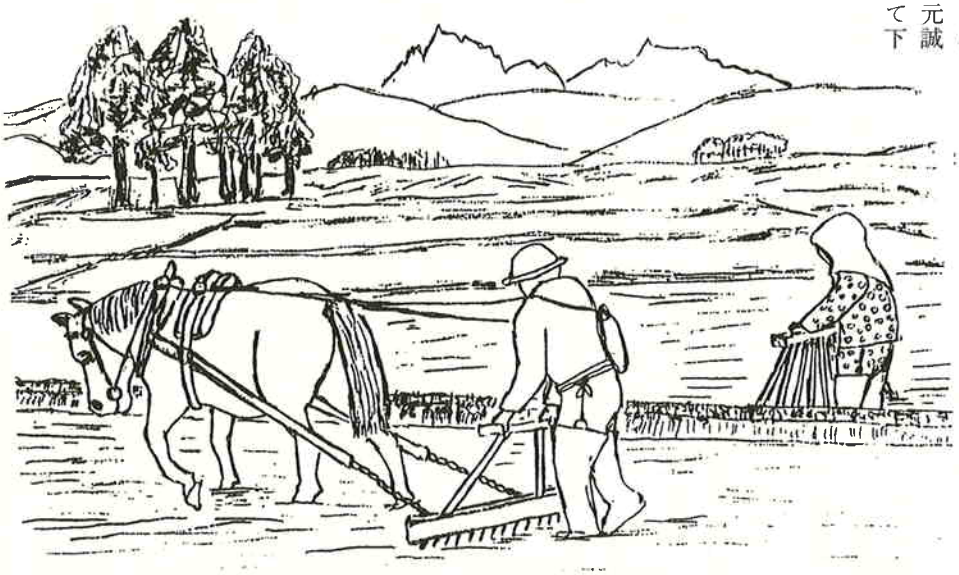
「わしは、産業組合が佐呂間で出来たころは、二〇才前だったので、その方の内容は知っていないが、川西に、昭和の始めころ産業組合の理事をしていたという、行元忠太郎という方の息子で。行元誠一という人がよく昔のことを知っているから、聞いて上げれるから」と言ってくれて。翌日の平成六年二月一四日山下寿一より知らせられたのが次の言葉、

「昭和の始めに、佐呂間村に産業組合が設立されたとき、行元誠一さんの親父さんの、忠太郎さんは、最初から理事に選らばれていて、産業組合の初代の組合長は、渡部長太郎さんであって。運営費に行き詰ったとき、うちの親父のも含めて、組合長の渡部長太郎さんの土地から、佐呂間村の組合の役員の財産を担保で、たしか、拓殖銀行か今はよく判らんが金を引き出して、組合の職員の給料を払ったり、農家の経営資金の貸し出しをしたと親父から聞いていた」と、八〇数歳の行元誠一から山下寿一は聞いて、筆者に知らせて下さったので。

渡部長太郎のことについて、これ以上くどくどと書きませんが、佐呂間村（現町）の開拓の礎の人であった人の照介とします。

記事作成協力者　山下　寿一
行元　誠一
小島善之丞
矢吹　俊治
渡部　　正
佐藤　常雄
河野　勝高

文責　　徳永　良行



佐呂間に水田が出来て機械化前の代掻きと種蒔風景